

復興期から発展期へ新ステージ！ 共に支え、選ばれるまちづくり

はしもとかつや
橋本克也
須賀川市長

ウルトラマンと 松尾芭蕉が溶け合うまち

福島空港(須賀川市・石川郡玉川村)が立地する臨空都市・須賀川市。その中心市街地はJR須賀川駅から南に1kmほど進み、釈迦堂川に架かる須賀川橋を渡った先に展開している。駅前通りを経て中心市街地に至るこのメインストリートは「松明通り」と呼ばれる。当地で420年以上続く日本三大火祭りの一つ「松明あかし」(11月)にちなんだ名称だ。

須賀川橋を渡ってすぐ右側の丘陵にそびえているのは、明治5(1872)年創立の輝かしい歴史を持つ公立岩瀬病院(旧県立須賀川病院)の偉容だ。旧県立須賀川病院は創立翌年に旧須賀川医学校を併設し、後藤新平など幾多の俊秀を輩出したことでも知られる。そして公立岩瀬病院は現在、一般病床279床、標榜診療科21を有する厚生労働省臨床研修指定病

院、救急告示病院である。東日本大震災により被災したが、地域とともに復旧を進め、平成25年に新外来棟竣工。昨年4月には産科婦人科を開設し、周産期医療の機能を併せ持つ、地域(須賀川市・岩瀬郡・石川郡)の中核的医療機関として、震災以前よりもパワーアップする形で見事によみがえった。

駅前から、この「松明通り」にかけては、世界に2つとない、ユニークかつ個性的な景観が展開し始める。

昭和41(1966)年にテレビ放映を開始して以来、次々と新ヒーローを生みだしながらさまざまなメディアで断続的に制作され、常に人気を博してきた『ウルトラマン』シリーズ・主要キャラクター(オリジナル・怪獣も含む)のモニユメント計14体が、道路の左右に次々と現れるのだ(平成26〜29年度に設置)。

これは須賀川市出身で『ゴジラ』シリーズの特撮監督、『ウルトラマン』シリーズなどの生みの親として世界的に知られる円谷英二監督

の顕彰事業の一環でもある。

同事業の詳細は後に述べるが、JR須賀川駅から「松明通り」を進んできた

人々は、このように近未来を舞台に活躍する特撮ヒーローや怪獣のモニユメントに導かれる形で、かつては会津街道・奥州街道屈指の宿場町としてにぎわい、俳聖・松尾芭蕉が『おくのほそ道』の道中、長期滞在したことも知られる須賀川を中心市街地へと、足を踏み入れることになる。

前後400年以上のスパンを持つ、過去・





現在・近未来をつなぐ歴史やイメージが渾然一体となったこの「道行き」には、須賀川市が東日本大震災の不幸な被災体験を克服しながら、着実に「新たな境地のまちづくり」へと歩を進めつつある現状が、端的に示されている

420年以上の歴史を誇る日本3大火祭りの一つ「松明あかし」



松明通りを彩るウルトラシリーズのモニュメント(怪獣ピグモン)

©円谷プロ

ともいえる。そしてこの中心市街地の中央に鎮座するのが、昨年3月30日に落成した須賀川市復興のシンボルであり、新たな飛躍への拠点ともなる新庁舎(地上6F、地下1F)だ。「東日本大震災から丸6年の時を掛けて、まさに待望久しい新庁舎がようやく、完成したことになります。免震構造を取り入れた防災拠点であり、安全安心な庁舎です(開庁は昨年5月8日)。

この新庁舎を単なる行政施設とは、私たちは考えていません。むしろ公共施設として、市民の皆さんにも共に広く活用していただく

き、市民の皆さんに『私たちみんなの家』と
思っていただけることをコンセプトに、建設
いたしました」

橋本克也・須賀川市長がそう語るように、
新庁舎に入ってまず目立つのは、市民を迎え
てにこやかに対応するコンシェルジュが待機
する受付と、市民の憩いの場とも位置付けら
れている広々としたホールである。この受付と
各課の窓口をつなぐシステムには『ウルトラ
窓口』、広々としたホールには『みんなのスクエ
ア』という愛称がそれぞれ付けられている。

新庁舎から始まる 「選ばれるまち」への船出

ちなみに『ウルトラ窓口』のウルトラは、
《(ウ)受付の、(ル)ルートをわかりやすく、





新庁舎落成式(中央のモニュメントはウルトラの父)

©円谷プロ



市民に大好評の新庁舎ホール「みんなのスクエア」

(ト)届出を、(ラ)楽にの頭文字をとったものである。新庁舎は1Fに生活環境部門および健康福祉部門を集約し、住民の異動や保険・年金、福祉関係の手続きや相談など、市民による市役所の活用頻度の高い部署の窓口を切れ目なく、手早く回れるような配置と動線の工夫がなされている。コンシエルジュは各窓口の場所を案内するだけでなく、タブレットを使いながら、手続きそのものの支援も行う。ウルトラ窓口はこうしたスムーズなシステム全体を指す愛称なのだ。

「そして『みんなのスクエア』という愛称には、文字通り市民の皆さんに、ここをみんなの広場(スクエア)として活用していただきたいとの思いが込められています(橋本市長)

『みんなのスクエア』は、前出の市長の言葉にあった「公共施設としての市役所」の《肝》となる場所である。新庁舎は建物(1F~3F)の片側約3分の2が執務スペース、片側約3分の1は市民の待合や休憩などのほか、職員も打ち合わせなどに利用できる開放スペースになっている。さらに4Fは議場、5Fは発電機などの機械室、6Fは『ウルトラフロア』の愛称をもつ展望階。『みんなのスクエア』をはじめとする開放スペースおよび展望階は、市役所業務が終了した後も午後9時まで利用できる。

「市民の皆さんにぜひ使っていただきたいと最初から考えてはおりましたが、実際に開庁してみましたら、中高校生が放課後や夏休



250年以上の歴史に彩られた国指定名勝「須賀川の牡丹園」

みなどに宿題をしに来るなど、老若男女の市民が予想以上に活発に利用してくださることに驚きとともに、大きな喜びを感じております(橋本市長)

防災拠点ともなる安全・安心な庁舎、市民に開かれた利用しやすい庁舎、機能性・柔軟性を重視した使い勝手のいい庁舎、建築資材の選定や自然エネルギーの活用など環境にやさしい庁舎、須賀川を象徴するシンボリックな造りの庁舎——。開庁してまだ1年も経過していない。だが前出のような市民の活用の仕方を見るにつけ、新庁舎建設に当たって当初から企図していたこれらの基本理念や基本方針が、市民に早くも受け入れられていることは明らかだろう。

須賀川市

市 政 ル ポ

(福島県)

折しも昨年12月半ば、平成30年度から施行される「第8次総合計画」が策定された。この新総合計画に掲げる将来都市像は《選ばれるまちへ ともに歩む自治都市 すかがわ》だ。須賀川市では昨年3月、「第8次総合計画」が「人口ビジョン」や「地方創生総合戦略」を包含する須賀川市の最上位計画であることを明確にした。「須賀川市総合計画策定条例」を制定している。その上で、市内9カ所での地域懇談会を重ね、岩瀬管内の5つの高校で「高校生の須賀川創生ミーティング」を開催するなど、市民との徹底的な意見交換を実施し、策定に至った。震災復興後初の総合計画を、名実共に市民協働を基本理念とする、新たなまちづくりの指針とするべく、綿密に準備を進めてきた。

の皆さんとの徹底的な意見交換の末に、改めてその精神を盛り込むことで合意がなされたという経緯があるのです(橋本市長)

宿場町として栄えた江戸時代の須賀川には、例えば現代の子育て支援をほうふつとさせる「赤子養育事業」という制度があった。また明治初期に創立された前述の旧県立須賀川病院(公立岩瀬病院の前身)の建設に際しては、地域有志による多額の寄付金などの貢献が原動力になった。さらに松尾芭蕉が須賀川に7泊したのは知人である俳人・相楽等躬の家だった。当時の須賀川には芭蕉が長期滞在するにふさわしい文化的土壌があり、それを支えていたのは町人(商人)たちの経済力、文化をはぐくんできた自治意識だった。

須賀川市「第8次総合計画」の基本理念には、そうしたDNAまでもが受け継がれ、盛り込まれているのだ。

市民交流センターが担うもの

須賀川市では現在、新庁舎や公立岩瀬病院などとともに、復興および新たなまちづくりのシンボルとして位置付けられるもう一つの施設が完成間近の状況になっている。市民交流センター「t e t t e (テッテ)」(地上5階建)である。これは「新たな文化交流と市民活動の拠点となる施設(橋本市長)であり、ステップアップした市民協働事業の基盤に不可欠な、自治意識の醸成に資する各種の活動やイベントなどの開催のほか、館内には図書館や「円谷英二ミュージアム」の整備などもなされる。今



相楽等躬宅跡地に建つ須賀川市芭蕉記念館(下)と中心市街地に点在する「俳句のきあんどん」(上)



1964東京五輪マラソンの銅メダリスト・円谷幸吉メモリアルホールには同選手の足跡が満載

年9月末に完成予定で、その後、館内の整備を経て、来年1月11日にオープンする。

「東日本大震災で本市は未曾有の被害を受けました。震災による死者・行方不明者は12名で、そのうち8名が市内西部に位置する藤沼ダムの決壊によるものでした。藤沼ダムはその後、復旧工事を経て昨年1月に再び水を湛え、ダムとして稼動しています。

また全壊家屋は1249棟に及びましたが、その約半数は中心市街地に集中していません。須賀川市は地盤のしっかりした地域とさされてきましたが、江戸時代に完成した中心市街地は地層の軟弱な場所もあり、液状化現象

に襲われたので

す。そのため旧

市役所庁舎と

ともに、総合福

祉センターなど

多くの公共施

設が使用不能

となりました。

現在工事を進

めている市民交

流センターは、

総合福祉セン

ターに代わる

新たな施設と

いう位置付けですが、子育て支援などの各種

福祉機能の強化はもとより、文化発信機能、

市民活動の拠点性の強化、生涯学習機能の強

化などを盛り込んだ、非常に画期的な施設に

なります」(橋本市長)

新庁舎とともに市民交流センターもまた、

市民参加による徹底的な意見交換に基づき、

企画・設計がなされている。

この中で注目されるのが最上階(5F)に設

置が予定されている「円谷英二ミュージアム」

の存在だ。

先ほど江戸時代に培われた住民自治とそこ

から派生した町人文化のDNAについて少し

触れた。須賀川市を故郷とする円谷英二監督

が体現した、「特撮」を通じての創意あふれる

モノづくり文化の創造および文化発信活動も



「円谷英二ミュージアム」や「図書館」等も入る市民交流センター工事現場



東日本大震災で決壊した藤沼ダムも復旧が完了

また、「須賀川ならではのDNAの発露」(橋本市長)といえるだろう。円谷英二監督とその後裔たちが牽引し、日本の映像文化の一翼を担ってきた実写映像による《特撮》は、CG全盛の現代においても「TOKUSATSU」と普通名詞化され、世界の一流映像作家たちに多大な影響を与えている。

「円谷英二監督の世界をいかに顕彰し、須賀川の文化発信の重要なコンテンツとして後世に伝えていくかは、須賀川市の長年にわたる課題でした。円谷プロダクションや東宝をはじめとする関係各位のご協力の下、いよいよその思いを形にしていくなための機が熟したといえます」(橋本市長)

その「機が熟した大きなキッカケもまた、東日本大震災だった」と橋本市長は言う。

須賀川市

市 政 報

(福島県)



円谷選手の偉業をたたえる「円谷幸吉メモリアルマラソン大会」(10月)

須賀川発信のシンボル《M78光の町》

「東日本大震災の復興支援にはあらゆる方面から、さまざまな形のご協力を賜りました。円谷プロダクションによる『ウルトラマン』たちの被災地支援活動もその一つでした。ウルトラマンが被災地に来てくれることで、年齢に関係なく、どれだけの被災者の方たちが励まされたか、想像もつかないほどです。その様子を見させていたただくにつれ、私は円谷英二監督の事績の大きさを改めて感じました。同時に円谷監督の故郷

でもある須賀川の復興と、その後の新たな発展へのシンボルとして、円谷英二監督の世界を顕彰させていただきたいと考えるに至ったのです」(橋本市長)

須賀川市では手始めに、震災から2年後の平成25年の子どもの日(《すががわ市M78光の町》(ウルトラマンの故郷はM78星雲)という仮想都市をネット上に構築。そこはウルトラヒーローたちが暮らす光輝く町で、誰もがネットで申し込むことにより、無料で光の町に住居登録でき、ヒーローと一緒に暮らせるという設定だ。

《M78光の町》には現在、1万2000人強の住民登録がなされている。市民交流センターが完成し、円谷英二ミュージアムが公開されれば、光の町の住人も急増することだろう。さらに現在、円谷英二監督を元祖に世界の映像コンテンツとなった日本の特撮文化に関連する貴重な作品の収集・保存・修復・展示などを目的とする「須賀川特撮アーカイブセンター」(仮称)の準備も着々と進んでいる。

また2020東京五輪に向け、須賀川市が生んだ日本初のマラソン五輪銅メダリスト・円谷幸吉選手の顕彰事業も推進されている。円谷英二監督の世界と併せ、2020東京五輪に際してのインバウンド効果の重要なコンテンツとなることが期待される。「復興から新たな発展期への移行はもちろん、言うほどにたやすいことではないと重々覚悟している」

と語る橋本市長だが、新たな発展期に向けての支えとなる発信力の醸成は、これまで述べてきたように着々と進んでいる。

さらに全国の都市共通の課題である人口減少化対策として、須賀川市(現人口約7万6000人)が位置する福島県中通り地区では現在、「公共施設のエリア内での共用や、各自備わる豊富な地域財産を互いに活用し合い、地域力を維持する」(橋本市長)べく、地域の中核市・郡山市(現人口約33万5000人)を中心に、15市町村の連携中核都市圏構築の計画が検討されつつある。そうした広域圏の動きと併せ、「磨けば光る原石が目白押し」の須賀川市の今後の動向は、要注目だ。

(取材・文＝遠藤隆／取材日平成29年12月8日)



空の玄関口・福島空港にもウルトラヒーローの守護神が立つ